

この人に聞く

吉田
鋼市氏



プロフィール 1947年兵庫県生まれ。工学博士／一級建築士、横浜国立大学名誉教授。1970年横浜国立大学工学部建築学科卒業。1973～75年エコール・デ・ボザール(パリ国立高等美術学校)及び古建築歴史・保存高等研究センター在学(仏政府給費留学生)。1977年京都大学大学院建築学専攻博士課程単位取得退学。1997年横浜国立大学工学部教授、2001年同大学大学院教授を経て、2013年に定年退職、名誉教授となる。専門は西洋建築史・近代建築史。1982年に神奈川県、1990年には鎌倉市の依頼を受け、長年にわたり地域内の近代建築物について調査・研究。1997年日本建築学会賞(論文)、2015年神奈川文化賞(学術)を受賞。『図説アール・デコ建築』(河出書房新社)、『鎌倉近代建築の歴史散歩』(港の人)、『ヨコハマ建築慕情』(鹿島出版会)、『日本の初期モダニズム建築家』『日本の盛期モダニズム建築像』(王国社)など著書多数。

長年にわたって、近代建築物の調査・研究が続けられている吉田鋼市氏に、これからの建築のあり方について、お話を伺った。(令和4年9月)

■横浜を中心とした歴史的建築物を生かしたまちづくり

これまで横浜は、歴史的な建物を残す努力を継続的に行ってきています。幸いにして、横浜港開港以降の近代における重要なものは概ね残っています。令和4年の都市デザイン50周年記念の展覧会にはたくさんの人が訪れたことから、一般的に横浜は歴史を生かした都市づくりをしてきたと認識されていると思います。

1988年に都市デザインに関わる「歴史を生かしたまちづくり要綱」と「横浜市文化財保護条例」の制定を起点として、文化財を保護するとともに、都市景観あるいは歴史的に重要なものを認定歴史的建造物として残そうとしたのです。要綱と保護条例が同じ年に整備されたのは示し合わせたわけではありませんが、当時、歴史を生かさないとまちづ

くりはいいものにならないとの認識があって、社会もそのようにゆっくりと変わり始めたことの表れだと思います。都市デザイン50周年となる現在から遡れば、1972年の横浜市での都市デザイン室設置に始まり、条例化については1980年代の半ばから準備していたわけですし、同時期に都市計画史の本を出版していますから、既に歴史の重要性への認識はあって、それが1988年に具体化したというわけです。

横浜にある国の建物保存の推移を見ていくと、まず、1993年の横浜第二合同庁舎(旧生糸検査所)はほぼすべて復元です。その後が2001年に修理が完成した横浜地方裁判所。背後に高い建物を増築した形でこれも復元ですが、オリジナルの材料を多く使用していることで、多少保存度が上がっています。2003年には横浜税関の修復・改築。元の建物のほぼ4分の3が残されました。そして、2009年にでき上がった横浜地方気象台は、元の建物が全面的に残りました。この約20年間で本物の建物の保存度が徐々に高くなっていることから、人々の意識とともに、国の意識もだんだん変わってきていることが窺えます。

その一方で、企業も容積増しなど実質的なメリットだけでなく、プライド、誇りを意識するようになってきているのではないのでしょうか。銀行や農協など、古典主義の建築がいくつもあったものが壊されていたのが、復元されるようになり、そこからさらに一部を残そうという雰囲気が変わりつつあります。そういう形で、横浜の景観が残されてきているということだと思います。官民含め主要なものでは、例えば、横浜正金銀行、今の県立歴史博物館も本物が残っています。県立歴史博物館は国の重要文化財になりました。そして、「横浜三塔物語」で知られる、横浜税関、神奈川県庁、横浜開港記念会館。横浜開港記念会館と県庁は国の重要文化財、そして、税関本関は横浜市の認定歴史的建造物です。このように、歴史を物語る景観や建物を残そうと、市も人々も努力してきたのだといえます。そして、それがまちの魅力になっています。

横浜市の職員では田村明さんを始め、優秀な人材が集まり、その方々が権限を与えられて自由に仕事をされていたと思います。そして、市長が代替わりをしながらも意識は受け継がれていった。その伝統が今も生きているに違いありません。その中に私も参加させてもらい、当時の行政や企業を含む、時代の雰囲気味わいながら勉強してきたという感じです。当時民間企業が関わると、企業、経営者にとっては建物保存と事業収益は相反して死活問題ですから、非常にシビアで簡単に保存とはいかない。敗北の歴史

もかなりありました。そういう経験を重ねながら50年近く、公共も民間も含めて、すごく勉強させてもらいました。そういう意味では、横浜のまち全体に思い入れが強く、一本一本の道路と、それから、建物も大体頭に入っているから、大げさにいうと、自分の庭みたいに思えるのです。

■まちにおける建築が果たす役割

1974年に1ヵ月間イギリス中を回ったことがあります。ある土曜日の夕方、「コングルトン」というまちに着くと正装した男女がたくさん集まってきて、どうやら地元の音楽家のコンサートに行くらしい。人口1万人程度の小さなまちで、彼らは自足している。程よく豊かな社会にいて、発展はないにしても何ら不満がない、そういった雰囲気を感じながら、ああ、成熟社会とはこういうのをいうんだなと思ったのです。当時の日本は国鉄が都市圏から地方へ行かせようと“ディスカバー・ジャパン”。一方イギリスの鉄道では、地方からロンドンに行かせようと“ディスカバリング・ロンドン”。この違いが対照的で印象深く残っています。イギリスでは各地方が自足していてロンドンへ行く必要がない。つまり、成熟した社会というのは、そこだけで十分なほどに完結しているのです。

成熟社会の根幹は、一つは歴史に対するプライドや信頼、もう一つが有機的なものに対する親しみ、つまり自然、この両方がなしていると思います。だから、あまり新しいものに執着せず、歴史的なものを大事にするのです。それから、有機的なもの、木など自然由来の素材を使ったものがどんどん増えています。日本もそういった成熟社会へ向かいつつあるといえます。

まちというのはパブリックでなくてもパブリック性は持っているわけです。最近、コモンという言葉がよく使われるようになりました。コモンというのは、パブリックではないけれども、共通のものという意味合いです。フィレンツェは元々プライベートな銀行や商社だった建物でもっています。それが現在はコモンな、あるいは場合によってはパブリックな空間や建物として遺産になっています。こうなるには500年ほどかかるのですが、やはりあまりプライベートなもの、パブリックなものと区別せずに、両方ともコモンだという意識でとらえていく方がよいでしょう。歴史ある建築がなくならないように、景観はコモン、みんなのものという意識を徹底することが大事だと思います。

まちの活性化は、必ずしも早く激しくする必要はなく、じわじわと味わい深いものにしていく方がよいのではない

でしょうか。日本もそういう方向に行かざるを得ないと感じています。もちろん意識もそういうふうに変えていかななくてはいけない。建築が果たせる役割は、デジタル社会にありながら、建築だけが本物の情報を伝えてくれることだと思います。本物の材料、マテリアルがあって、建築を見ると一瞬にしてその時代の雰囲気が分かります。だから、建築の存在は大きいのです。

■歴史的建造物保存活用の展望と日本の将来像

人々が古いものに価値、魅力を感じるようになってきたわけですから、壊す前にとにかくよく考えることです。近年、歴史的な建物を生かそうと様々な試みがあちこちで見られます。民間企業では、例えば大日本印刷の「市谷の杜」のように、古い建物をミュージアムとして生まれ変わらせる事業が増えてきました。また、インバウンド需要もあって古民家への宿泊を提供する「NIPPONIA」も評判です。それから、JINS 創業者の田中仁さんがプロデュースした「白井屋ホテル」。この建物自体は、非常にオーソドックスな1970年代のものです。吹き抜けのラウンジや、人が集まれるアート空間をつくって賑わっている。人々の景観の記憶に残っているから前橋の活性化に何とか役立つものとして残したいと考えたようです。このように、歴史的なものを好む、それにお金を投じてもいいと考える人たちが増えているのは確かだと思います。

様々な歴史ある建物を残し、活用していこうという努力が目に見える形で出てきていることから、若い企業経営者たちの中には、お金を稼ぐことに執着せず、社会性を持った事業を手掛けたいと考えている方がいると期待しています。歴史と建物を合体させた形で地方を活性化していく動きはあちこちで見られます。このように、人々の意識が行政を動かし、企業家も動かすのは理想的だといえます。

日本は人口減という根本的な問題があるため、これからは成熟を味わいつつも、じわじわと縮小していくことが運命づけられています。また、ロンドンやニューヨークのように、様々な人種が集まって生活を営んでいる、これが日本の成熟社会、将来の姿になるのかなとも感じています。そういった中で、日本は歴史を生かしながら、楽しみながら、そして海外に向けて発信し、その魅力を理解して日本に来てもらう。それが、日本が目指すべき唯一の道のように思います。最近、世界における日本の科学技術力の低迷が取りざたされている中で、やはり歴史を生かすことが一番大事だと改めて感じています。

INTERVIEW

この人に聞く